

# 保育士養成校の地域子育て支援における役割

永谷 孝代\*

## 要約

本稿の研究の主旨は子育て支援の利用者のニーズを明らかにし、短期大学での授業「子育て支援演習」における「子育てひろば」の実施内容と意義を検証することにある。まず、子育てひろばを利用している人のニーズ調査を行った。その結果、初めて「子育てひろば」を利用する保護者の子どもは大半が1歳未満であること、初めての利用者は「食べる・寝る・遊び」と言った子どもの成長への悩みが大きい事がわかった。また、「子育てひろば」を何回も利用している保護者は「公園」や「子育てひろば」の充実など子どもを連れていける「場所」への要求が高い。そして、どの保護者にも言えることは、育児に追われて自分の時間がないことがしんどさにつながっていた。

次に、「子育て支援演習」の授業で行った「子育てひろば」において、学生が主体となり、計画から参画する事で、学生の「子育てひろば」の必要性や地域子育て支援への学びが深まった。子育て支援に多様な団体や機関が参画することで、保護者にとっては、気軽に子どもを連れて行ける居場所が増えることに繋がる。したがって、保育士養成校が「子育てひろば」に参画する事の意義は大きいと考えられる。

キーワード：子育て支援    子育てひろば    保護者ニーズ

2018年9月28日受理（実践研究）

## 1. はじめに

### 1) 子育て支援とは

2010（平成22）年に閣議決定された「子ども・子育てビジョン」は、これまでの『少子化対策』から『子ども・子育て支援へ』と視点を移し、社会全体で子育てを支えるとともに、『生活と仕事と子育ての調和』を目指しながら、次代を担う子ども達が健やかにたくましく育ち子どもの笑顔があふれる社会のために、子どもと子育てを全力で応援する」事を目的としている。<sup>1)</sup>

また、2012（平成24）年に施行された「子ども・子育て支援法」では第1章に「わが国における急速な少子化の進行並びに家庭及び地域を取り巻く環境の変化に鑑み、（中略）一人一人の子どもが健やかに成長することができる社会の実現に寄与することを目的とする」と示されている。よって、ここで示さ

れている「子育て支援」とは、「子どもたちの健やかな成長」を社会全体で考えていくことであると言える。

さらに、角張らは子育てとは、「その過程において、肯定的・否定的両側面の感情や経験を通して揺れ動きつつ、親自身も変化する過程である。『肯定的側面』『否定的側面』を内包すると考えられる『子育て』において、育児不安やストレスをはじめとする不定的側面を軽減する要因として、様々なサポートが考えられる。子育てが子どものみならず親をも発達させるという観点から考えるならば、『子育て支援』は子どものため・子育てのための支援であると同時に『親発達支援』でもあるということができよう。」と示唆している。<sup>2)</sup>

また、前述の「子ども・子育て支援法」第2章では「父母・その他の保護者が子育てについての第一

\*大阪健康福祉短期大学

連絡先：永谷 孝代

〒590-0075 堺市堺区南花田口町2丁3-20

大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

E-mail: t.nagatani@kenko-fukushi.ac.jp

義的責任を迫う」している。ゆえに、「子育て支援」とは「子どもの健やかな育ちの保障」と「親（保護者）支援」の両立が重要であるといえる。

## 2) 昨今の子育て支援の現状と課題

わが国で少子化問題や待機児童問題が取り上げられてかなりの年数がたつが未だ社会問題になっている。2015（平成 27）年に施行された「子ども・子育て支援新制度」では、「核家族化や地域のつながりの希薄化、子育ての孤立化、負担感の増大」などが子育て状況としてあげられている。また、2017（平成 29）年改定の保育所保育指針（以下、指針という）では「子どもが地域の中で人々に見守られながら群れて遊ぶという自生的な育ちが困難になり、乳幼児と触れ合う経験が乏しいまま親になる人も増えてきている一方で、身近な人々から子育てに対する協力や助言を得られにくい状況におかれている家庭も多い。」「子育てに対する不安や負担感、孤独感を抱く人は依然として少なくない。」「児童虐待の相談件数も増加しており、大きな社会問題となっている。」と子育て実態を分析している。<sup>3)</sup>

「すべての子どもの健やかな成長」と「保護者支援」を掲げて進められてきた子育て支援であるが、指針に「多様化する保育ニーズに応じた保育や、特別なニーズを有する家庭への支援、児童虐待の発防止及び発生時の迅速かつ的確な対応など、保育所の担う子育て支援の役割は、より重要性を増している。」と指摘されているように、今、子育てにおける多様な問題や児童虐待への対応、貧困層へ支援等の充実が課題である。

## 3) 地域子育て支援の課題

筆者は短期大学で「子育て支援演習」の授業を受け持っている。特に「地域子育て支援」についての学びを深める事を目的としている。2015（平成 27）年の「子ども・子育て支援新制度」の施行により、地域においては「地域子育て支援拠点事業」が量的にも拡大している。子育て層が気軽に通えるようにと「子育てひろば」事業も急速に量を増やしている。本学が立地している大阪府堺市でも「堺市子ども・子育て会議」を設置し、ニーズ調査の結果に基づいて、事業計画が策定されすでに 3 年が経過する。地域子育て支援事業としては、「まちかど子育てサポー

トルーム」（7 ヲ所、38,058 人）「子どもルーム」（14 ヲ所、20,399 人）の事業を「みんなの子育てひろば事業」と変更し量の拡大を行った。2016（平成 28）年には 31 ヲ所、71,363 人の利用者に増えている。<sup>4)</sup>このように、地域においても「地域子育て支援センター」や「子育てひろば」「子育てサロン」など、親子で気軽に行ける場所が増えてきている。一方、虐待問題の増加など「量」だけでは解決しない問題もある。

今回、「子育てひろば」を利用している保護者にアンケート調査を行うことで、子育て実態を検証し、「子育てひろば」の果たす役割を考察した。子育ての孤立感や負担感が大きい保護者にとっては、身近に通える「子育てひろば」等の事業は、心の拠りどころになっていると考えられる。今後、身近なところにいつでも相談や遊びに行ける「子育てひろば」の利用者を増やしていくことは、虐待や貧困の直接的な解決にはならないが、安心できる居場所づくりを拡充していく事に繋がると考える。

## 2. 「子育てひろば」を利用する保護者アンケート調査から見える子育てニーズ

### 1) アンケート調査の概要と目的

「子育てひろば」2 ヲ所の施設にアンケート調査を行った。アンケートの対象は利用する保護者から 30～50 人くらいを施設の職員に抽出してもらった。期間は 2018 年 6 月 11 日～7 月 11 日の約 1 か月である。

本調査のアンケート項目は①記入者の家族構成、②子どもの月齢、③「子育てひろば」をどのように知ったか、④「子育てひろば」に週何回くらい行くか、⑤現在、利用している「子育てひろば」以外に子どもといっしょに遊ぶに行く所があるか、⑥将来保育園（幼稚園、こども園）の入園を考えているか、⑦子育ての悩みは何か、⑧市に充実してほしいこと、⑨子育てに悩んだときに相談する人、⑩子育てで楽しいと思った事は何か、⑪子育てでしんどい、困った事は何か、の 11 項目である。①～⑨については、選択枝より一つ又は複数の選択、⑩⑪については自由記述である。また、アンケート項目は堺市が 2013（平成 25）年に行った地域実態調査の項目を参照した。

なお、本研究は「大阪健康福祉短期大学紀要『創発』研究倫理ガイドライン」に基づいて行われている。アンケートの実施にあたって、調査分析し、まとめた結果を発表することや授業に利用することを施設側に説明し了承をもらった。同時にアンケート対象者に対してその旨を記載した依頼文を配布した。無記名による実施で個人情報についての配慮を行った。また、アンケートの記入をもって説明への了承とみなした。

アンケートの目的は「i) 子育てひろば利用者の子育て実態」「ii) 子育てひろばを利用している保護者の保育所入所に対する意向」「iii) 子育てひろばを利用する人の子育ての悩みやニーズは何か」について考察する事である。

## 2) アンケート結果

アンケートの集約数は、A施設利用者35人、B施設21人である。B施設は堺市の中でも最も利用率の高い施設であり、新規の利用者も多いとの事だったので、新規利用者に限定して調査してもらった。以下、A施設（継続利用者群）、B施設（初回利用者群）と位置付ける。

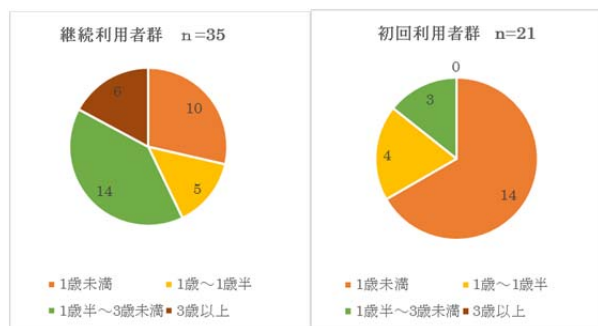
### ①記入者の家族構成

家庭の状況を見ると、両群とも97%が両親（父・母）そろっている家庭である。また、きょうだいの人数では、継続利用者群は54%、初回利用者群57%が子どもの人数が一人であった。

### ②子どもの月齢

子どもの月齢は、継続利用者群は、1歳未満10人（28.6%）、1歳～1歳半5人（14.3%）、1歳半～3歳未満14人（40%）、3歳以上6人（17.1%）であるのに対して、初回利用者グループは1歳未満14人（66.7%）、1歳～1歳半4人（19%）、1歳半～3歳未満3人（14.3%）、3歳以上0人であった。

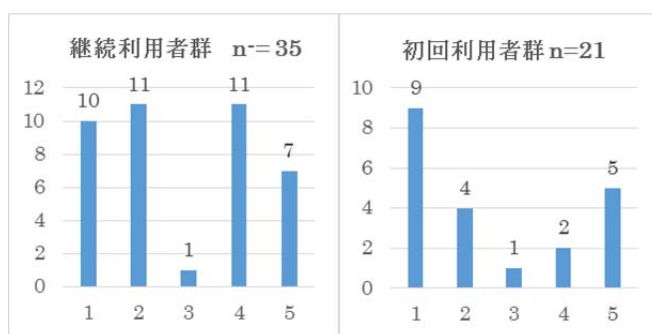
## Q2. 子どもの月齢



### ③「子育てひろば」をどのように知ったか

継続利用者群は「通りがかりに知った」「友達」11人（31.4%）（が最も多く、初めてひろばの来園した人を対象に調べた初回利用者群では「市のホームページ」9人（42.9%）であった。

## Q3. 「子育てひろば」をどのように知ったか



### <回答項目>

1. 堺市ホームページ
2. 友だちの誘い
3. 祖父母・親戚
4. 通りがかり知った
5. その他

### ④「子育てひろば」に週何回くらい行くか

両群とも「不定期」が最も多く、次に「3日程度」であった。

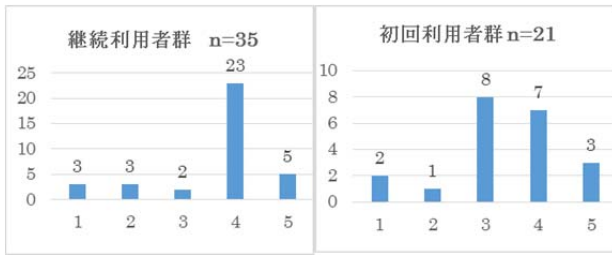
### ⑤現在、利用している「子育てひろば」以外に子どもと一っしょに遊ぶに行く所があるか

その他に行く施設では初回利用者群は「今のひろばだけ」の回答が多く、継続利用者群の備考欄には「ショッピングモール」「公園」「他のひろば」の記載が目立った。

### ⑥将来の入園について

継続利用者群は「3歳までは自分で見たいと思っている」が23人（65.7%）で最も多い。初回利用者群で最も多かったのは「育児休業中」で8人（38.1%）である。続いて「3歳ぐらいまでは自分で見たい」が7人（33.3%）であった。継続利用者群では育児休業中は2人（5%）であった。

### Q.将来の入園について



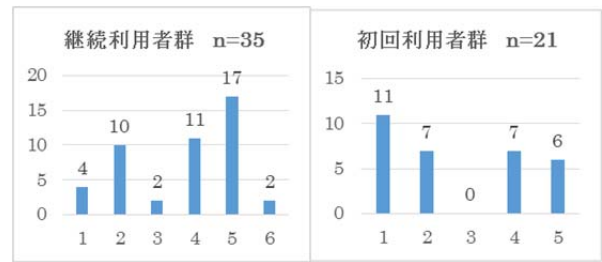
- <回答項目>
1. 今すぐ入所したい
  2. 入所申し込みしたが、入所できなかった
  3. 現在育児休業中
  4. 3歳くらいまでは自分で育てたい
  5. その他

#### ⑦子育て中の悩み

継続利用者群は月齢が高い子どもが多いので、「トイレトレーニング」「しつけ」「言葉が遅い」などが多い。初回利用者群の子どもの月齢は1歳半未満が大半なので「離乳食・食事」が最も多く、続いて「睡眠」である。

### Q.子育て中の悩み

### Q.市に拡充してほしいこと



- <回答項目>
1. 年度途中でも入所できる保育施設を増やしてほしい
  2. 一時保育
  3. 子育て相談機関
  4. 子育てひろばの増設
  5. 公園の充実
  6. その他

⑨「子育てに悩んだときに相談する人」は両群とも「祖父母」「夫」「友だち」が多かった。

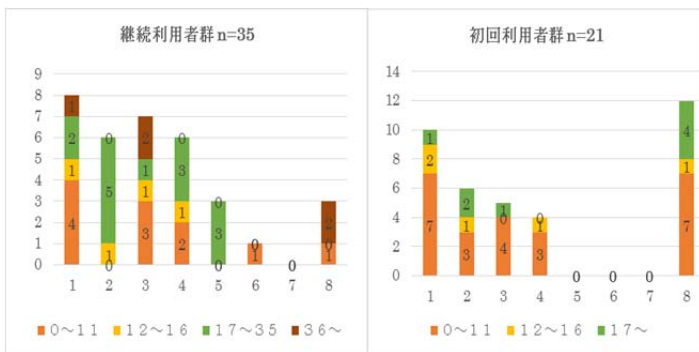
⑩一方、「子育てで楽しいこと」の自由記述では「子どもの成長が見えたとき」「大人の言っていることが理解できたとき、できることが増えたとき」「笑ってくれること増えたとき」と日々の成長が保護者の喜びにつながっている。

⑪「子育てについてしんどい、困ったこと、悩んだこと」の自由記載では「離乳食を思ったように食べてくれない」「夜2時間おきの授乳」「偏食」「親からすると簡単と思えることが子どもができない時教え方がわからなくなる」「この教え方でいいのかと不安になる」など不安が記述されている。

### 3) 考察

②～⑤の結果から、初回利用者群は月齢が小さいので、外に出る機会が少なく、情報を得るためにホームページを活用している人が多いことや子どもを連れていく機会も少ない事から決まっていける場所も少ないことが推測される。継続利用者群からわかることは、月齢が大きくなるにつれて特定の「子育てひろば」の利用が増えている。また通りがかりに見つけた「子育てひろば」の利用が最も多い事から、「子育てひろば」に対する安心感があり、気軽に歩いていける場所にあることが利用しやすさにつながっていることが推測される。

⑥の結果から、継続利用者群は「3歳までは自分で見たい」と思っている人が最も多く、



- <回答項目>
1. 離乳食・食事
  2. トイレトレーニング
  3. 睡眠
  4. しつけ（自分でできるようにしたい）
  5. 言葉が遅い
  6. 身体的発達（歩行が遅い等）
  7. 他の子どもに興味を示さない等対人関係
  8. その他

#### ⑧「子育て支援で拡充してほしいこと」

継続利用者群では「公園を充実してほしい」17人(48.6%)、「いつでも遊びにいける子育てひろばをもっと増やしてほしい」11人(31.4%)、初回利用者群では「年度途中でも入所できる保育施設を増やしてほしい」11人(52.4%)、「一時保育」「子育てひろばの増設」7人(33.3%)であった。

入園希望は「幼稚園」が多かった。このことから、専業主婦が多い事が伺える。それに対して初回利用者群は「育児休業中」が最も多く、次に「3歳までは自分で見たい」が続くことから、育児休業中の保護者はいずれ仕事復帰し、「子育てひろば」もその期間だけの利用である。仕事復帰しない専業主婦等は継続して「子育てひろば」を活用していることが推測される。

⑦子育て中の悩みでは、月齢が低いほど、「離乳食」や「睡眠」など、子どもの生体リズムに直結する悩みが多く、月齢が高くなるにつれ、「トイレトレーニング」や「しつけ」など、子どもの生活リズムや子育ての方法に関する悩みが増えている。また、子育ての悩みは自由記載⑩の質問の子育てのしんどさにつながっていることが推測される。

⑨の「市に充実してほしいこと」は待機児童解消が社会問題となっている今、「保育所の増設」の回答が多いのではないかと予測したが、保育所の増設の回答が多かったのは育児休業中の人が多い初回利用者群で、継続利用者群で最も多かったのは「公園の充実」であった。また、両群とも「子育てひろば」の増設の回答も多く、利用者にとっては、もっと身近なところに「子育てひろば」や「子育ての相談機関」の増設を希望している事が推測された。

⑩⑪の自由記述で子育ての悩みで最も多く記述されていたことは「自分の時間が少ない」「夜、眠れない」「24時間一緒なのが息苦しい。一人の時間がないのがつらい。」「泣いて抱っこを求めてくる」「お出かけしたが、家の用事ができない」「学校行事や病院・介護の時に下の子を預かってほしい」「夫の協力が少ないこと。一人でお風呂に入れるとき」など、「時間」に対する記載である。質問⑦（表4）の結果と⑩の自由記載の悩みを照らし合わせると、「24時間子どもと一緒に生活」の中で「食事・睡眠・排泄」などの基本的な生活習慣を身に付けさせたいと願いながらも「母親一人でこなしている」ことがストレスにつながっていることが推測される。「子育てひろば」はこうした母親が息抜きできる場所、子育ての悩みを共有できる場所、相談できる場所として安心できる居場所になっていると考えられる。

今回のアンケート調査では、経済的な調査項目は

なかったため利用者の経済状況はわからないが、結果から推測される事は、子育てひろばに通っている家庭はすぐに働きに出なくてもよい経済的に安定した家庭が多いと考えられる。

アンケート調査の目的であった「i、子育て実態」については、月齢が低いほど周りに相談できる人が少なく「子育て不安」「子育ての孤立感」が高く、インターネットなどの情報を求めている。しかし、「子育てひろば」等に出かけていく機会や行動範囲が広がることで相談できる人や情報も増え子育てに対する喜びも増えていくことが推測された。「ii 『子育てひろば』を利用している保護者の保育所入所に対する意向」については、継続利用者群では3歳までは自分で見たいと思っている人が多く、入園希望としては幼稚園と答えた人が多いことから、「子育てひろば」を継続して利用している人は専業主婦が多いことが伺える。「iii、『子育てひろば』を利用する人の子育ての悩みやニーズは何か」については、継続利用者群は専業主婦が多いことから、専業主婦のニーズは「公園」や「子どもを連れて遊びに行けるところ」の充実など日常の子育てに関する要求が多い。初回利用者群では、育児休業中の人には仕事復帰の要求も高く、保育所入所への要求が高いが、初回利用者の中にも専業主婦が含まれることから、そのニーズは分散していると言える。

以上の結果から、「子育てひろば」は量的に拡充されてきたが、利用者の感覚ではもう少し身近なところにもっと増やしてほしいと思っている事である。また、育児休業中などに「子育てひろば」を一時的に利用する層と3歳までは継続的に利用する層があり、それぞれにニーズの内容が異なっている事がわかる。

また、今回のアンケート調査では、家族背景についての項目が不十分であり、回答してもらった保護者（すべて母親であった）の就労に対する質問項目がなかった。もともと専業主婦なのか、就労していたが子育てのために仕事を辞めたのか、就労しているが育児休業中なのか等、保護者の就労状況に踏み込めていない。子育て支援における課題を考える上では、家族背景は不可欠であり、調査結果においても、現在の社会状況の中で保護者の本来のニーズに踏み

込めなかったと言わざるを得ない。今後、今回のアンケートを深める上でも継続して調査を続けていきたい。

### 3. 本学における「子育てひろば」の開催

#### 1) 「子育てひろば」を開催する目的

近年、大学での「子育てひろば」の開催も増えてきている。保育士養成校がこうした取り組みに参画することは地域の子育て支援に貢献すると同時に学生の大きな学びに繋がる意義があり、本学においても地域との連携が課題と考えられることから、今年度は筆者の受け持つ「子育て支援演習」の履修者で試みた。

学生は、保育所や養護施設などの児童福祉施設での実習は必須として経験するが、地域での子育て支援について具体的な学びの場は少ない。「子育て支援演習」の授業では、「地域の子育て支援」についての学びを深めるために、履修した学生を引率して毎年「子育てひろば」の体験学習を行ってきた。その中で、保育所実習では経験できない「親子と一緒に遊ぶ」ことや「保護者の話を直に聞く」ことができる。学生からも「親子で一緒なので、どのように声を掛けたらいいかわからなかったが、徐々に近づいて子どもから遊びに来てくれた」「保護者から、頑張っている先生になってねと励まされた」などの感想が寄せられている。しかし、学生の学びは「楽しかった」が到達であり、「子育てひろば」を運営する保育者の配慮や工夫、地域における子育て支援の意義についての学びにまで到達しないことを感じていた。

大学で「子育てひろば」を開催することで、「主体的に学生が地域の子育て支援に参画すること」「子育て支援の意義についての視野を広げること」事を目標とした。また、今後大学として地域の子育て支援の一翼を担うことができないかという課題をもって、学生とともに計画を進めた。

#### 2) 「子育てひろば」開催の実際

授業内容は子育て支援の基本を押さえた後、「子育てひろば」にフィールド・ワークに出かけた。「子育てひろば」の体験を基に大学で開催するために必要な準備を進めた。

### 7月25日(水) 子育てひろば「けんぷく」 実施計画書

日時	7月25日(水) AM10:00~11:15	場所	101教室
ねらい	・地域の子育て要求を知る ・企画・立案・準備を進め、協力しながら「子育てひろば」を開催する		
時間	プログラム	備考	
9:00	・101教室集合 出席をとる ・会場準備(教室配置図)	(教室配置図) ①遊びコーナー (教室配置図) ②お楽しみ会	
10:00	・開会挨拶(司会各コーナーの案内) ＊来た人から自由にあそぶ ・学生は各コーナーにつき、子どもといっしょに遊んだり、保護者対応をする		
10:45	あそび終了(大体片付ける) ・お楽しみ会 ① グループ 手遊び・ふれあいあそび「ばすにのって」 パネルシアター ① グループ てあそび「ピカチュウ」・「おおきくなったらなんになる」・絵本「だるまさんが」 ② グループ 手遊び「ぼんだ・うさぎ・こあら」 ふれあいあそび「きゅうりができた」 パネルシアター「ぞうのぼんやさん」 ③ 堺っどいグループ 手遊び「トントントンアンパンマン」 ふれあいあそび「1本橋」 体操「サンサン体操」		
11:15			
11:15	開会・片付け		

「子育てひろば」の遊びコーナーはダンボールや新聞、ペットボトルなどの素材を利用して、すべて手づくりのおもちゃを配置した。お楽しみ会のプログラムは、フィールド・ワークで披露してきたものを構成して、親子で楽しめる内容を工夫した。「子育てひろば」開催の市民周知はフィールド・ワークの時に利用者に学生が作成したチラシを配布した。

また、本学卒業生で子育て中の人に案内電話をしたり、大学のブログにアップした。開催日当日、本学の最寄り駅前でチラシを配布した。

当日は11組の親子が参加した。その内、地域からの参加が6組、本学の卒業生親子が5組である。参加の子どもの年齢は11ヶ月未満5人、1歳～1歳6ヶ月未満3人、1歳6ヶ月～3歳4人であった。

<参加者から学生が聞き取りした感想>

- ・いろいろな所で子どもと一緒にいける場所があるとうれしい

- ・駅から近かったので来やすかった
- ・久しぶりに会って（卒業生や教員と）うれしかった。大学でこのような取り組みがあると子育ての事も相談できたり、交流もできるのでうれしい。

#### ＜実施した学生の感想＞

- ・来てくれた子どもは、初めての場所で緊張したのか誘ってもなかなかあそんでくれなかったが、親子で遊んでいる様子を見ているととても笑顔で喜んでくれてよかった。
- ・チラシをみて、わざわざ来てくれて、たくさんの親子が参加してくれたので、子育てひろばが大切で、身近にあるべきだと思った。
- ・自分たちが主体となって開催して、続々と親子が集まってきて「これは遊びじゃないんだ」と気が引き締まった。危険はないか、ゴミは落ちていないかなど、みんなで確認したので、子どもに怪我なく終えられたことがよかった。
- ・2ヶ月の赤ちゃんを抱っこさせてもらい緊張したが、いい経験になった。
- ・お楽しみ会をするとき、学生が前に立つだけで圧迫感を与えるので、立ち居地や姿勢にもう少し工夫がいると思った。
- ・ひろばに参加の保護者は先生（教員）に相談している人もいて、少しでも情報を集める事が保護者の安心感につながるのだと思った。

などの感想が寄せられた。

#### 3) 「子育てひろば」開催における評価・反省

「子育てひろば」来た子どもの月齢は、2ヵ月1人、4ヵ月2人、8ヵ月1人、1歳代3フィールド・ワークの体験から、月齢の低い子どもが中心であることが予想できたので、安全面・衛生面を確保する事、年齢にふさわしいおもちゃを用意すること、居心地のいい場所を作ることを大切にしたい。そして、おもちゃの感触や誤嚥注意などの配慮をして手づくりおもちゃを作り準備を進めた。はじめは消極的な態度だった学生も多かったが、実際におもちゃができあがってくると、素材やあそび方の工夫をしたり、開催に間に合わせるためにグループ内で協力しながら居残りしての作業する姿がでてきた。そして、当日、親子が来はじめると全員の顔つきが変わり、主体的に子どもと関わったり、保護者へ話しかけたりする

姿が見られた。感想でもあるように「自分たちが開催しているという責任感」や「小さい子どもへの配慮や工夫」などに学生自らが気づいたことや、地域の子育て支援について考えるきっかけになったことは大きな学びにつながった。

この経験から、学生が主体で進める大学祭の取り組みにおいて「子育てひろば」のコーナーを設置する計画が現在進められている。

反省点は、前述のアンケート調査の分析が遅れたために、調査結果に基づく保護者ニーズについての学びが深められなかったことと選択科目で履修者だけで行ったので、学生全員の学びにはならなかったことである。この結果は、次年度の授業に生かしていきたい。

#### 4. 保育士養成校として地域の子育て支援に参画する意義

今回のアンケート調査や「子育てひろば」の開催で、子どもを連れて散歩に行ける範囲に数多くの「子育てひろば」や親子がリフレッシュできる居場所づくりは重要であることがわかった。

今回の調査では、ひろばを利用していない家庭の状況まで見ることはできなかった。木脇は「必要なのは『少子化』ではなく、『子育ての社会化』対策をどうするかを考える視点である」とし、「国や自治体は、遊び場としての子育て支援拠点事業の数を増やす事で子育て支援を完結してはならない。多様なニーズに焦点をあて、利用者が何を求めているか、あるいは利用できない親子が何を求めているかを探っていく必要があるだろう。そのなかで、少数派の親子をサポートする視点を忘れない事が重要である」と指摘している。<sup>5)</sup>

子ども・子育て制度が施行されて以降、地域の子育て支援事業の量的拡充が進んでいる。一方、虐待や貧困問題が社会問題として深刻になっている。全ての子どもの健やかな成長のために適切な環境が等しく確保されるためには、「子育てひろば」の拡充だけでは、不十分なことは明白である。虐待や貧困の中でしんどい家庭の親子は「子育てひろば」を頼って来館するゆとりさえない。よって「子育て支援」が社会化されることは重要である。

しかし、「子育てひろば」の量的拡充で、「通りにかきに見つけた」と立ち寄る保護者も多いことが今日のアンケート調査で明らかになったということは、「子育て不安」や「孤立化」の保護者の救いになり、虐待等を未然に防ぐ防波堤になっているのではないだろうか。「身近なところでいつでも相談にいける」「疲れた時にリフレッシュできる」居場所づくりは子育て支援にとって重要である。様々な子育てに関係する団体が子育て支援にかかわり、地域の中の居場所作りに参画していくためにも、保育士養成校もその一翼を担っていくことは重要である。また、今回は初めての取り組みで、地域への周知は短期間であり、周知場所も限定的であったため、広範な地域に呼びかける事が困難だった。しかし、本学の卒業生に呼びかけたことで、卒業生と在校生を結び、卒業生への子育てサポートとしての機会につながった。このことから、大学、在校生、卒業生を子育て支援を通して、お互いに交流し、学び合える「子育てひろば」としての新たな目標を見出すことにつながった。

また、保育士養成校で行うことのメリットとして場所的にも安心感があり、学生との出会いの中で利用もリフレッシュできる。そして、保育養成校なので、子どもや保育、子育て支援の分野の専門教員がたくさんいるということがあげられる。本学で開催した「子育てひろば」の時も学生に遊んでもらって喜ぶ子どもの姿を見て保護者もとてもいい顔をしていた。また、保育所実習では経験できない小さい

赤ちゃんをだっこさせてもらったときの学生の不安そうな顔を見守る保護者の表情は少し誇らしげに見えた。通常の「子育てひろば」ではない学生ならではの光景である。まだまだ未熟な学生の「学びたい、知りたい」気持ちが「子育ては学生よりちょっと先輩」という親としての気持ちの再確認につながり、子どもへの愛おしさを感じる瞬間になったともいえる。今後、「子育てひろば」を継続的に開催し、保育士養成校として、地域の子育て支援に貢献し、地域に根ざす取り組みを行っていくことが課題である。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 内閣府ホームページ 少子化対策 「子ども子育てビジョン」の概要
- 2) 角張 慶子・小池 由佳 2010年 『『子育て支援』が親に与える影響について—『親子の居場所』の利用による子育てにおける変化—』 『人間生活学研究』第1号 65-76
- 3) 保育所保育指針解説書 厚生労働省編 「3. 改定の背景及び経緯」
- 4) 堺市ホームページ 「子ども・子育て会議 堺市子ども・子育て支援事業計画の平成28年度進捗状況について」
- 5) 木脇 奈智子 2012年 「多様化する『子育て支援』の現状かと課題—新たなニーズと対応する事例から—」 『藤女子大学 QOL 研究所紀要』Vol.7,NO.1 P41

# Roles of training schools for nursery school teachers in local parenting support

Takayo Nagatani\*

## Abstract

The objectives of this study were to clarify the needs of users of parenting support and examine a child-rearing program performed as part of a parenting-support class at a junior college. We first performed a survey on the user needs of the child-rearing program. The results showed that most of the children whose parents used the program for the first time were younger than 1 year old, and that such users had concerns about the growth of their children. In addition, parents who used the child-rearing program many times strongly desired the inclusion of fulfilling places, such as parks, in the program. Many parents stated they were tired and did not have time due to the demands of child rearing. Next, students deepened their understanding of the needs for the child-rearing program and local parenting support after they undertook leadership of the program in the class on parenting support. When various organizations participate in parenting support, parents have more places they can take their children. Therefore, it is important that training schools for nursery school teachers participate in child-rearing programs.

Key words: parenting support, child-rearing program, needs of parents

---

\*Osaka College of Social Health and Welfare  
Contact Address : Takayo Nagatani  
〒590-0075 2-3-20 minamihanadagushi-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka  
Osaka College of Social Health and Welfare  
Department of Child Care and Welfare  
E-mail : t.nagatani@kenko-fukushi.ac.jp